

平和のいのり

浜松市立広沢小学校 五年 武藤 礼奈

「仲良しの子と同じクラスになれますように」

私は、たぶん春休み明けの始業式の日、一年で一番強く祈る。神様、どうかどうかお願いします。とつぶやいてから、玄関のドアを開ける。

その外とえば、「今日の給食がカレーでありますように」とか、「運動会で自分の組が優勝しますように」と言った事だ。

この本の中に出てくる、いのり人々の横顔に、空を見上げる表情に、私は、はっとした。大人も子供も笑顔がないからだ。

私はこの夏、こんな真剣な表情の人に出会った。父の友人を訪ねて長崎を訪れ、無きゆう洞という防空ごうを見学した時のことだ。第二次世界大戦当時、子供達が避難する場所がないので、当時の校長先生が先生と生徒達自身で防空ごうを掘ることを決められた。ガイドさんはその時三年生。高学年の五、六年生が掘り進め、三年生だったガイドさんは、けずった石を外に運び出しておられたそう。ツルハシなどの道具のみで掘り進め、たったの二年で完成させたとのこと。「空しゅうのサイレンが鳴ると怖かったです。戦争は絶対にあつてはなりません。」とお話して下さった表情はとても固くて、平和への強いのりを感じた。

その後、原爆ドームでは実際に投下された原爆の模型を見た。海外の人が模型の前でピースをして写真をとっているのを見て、おどろいた。何故、笑顔でピースなんかできるのか、と。私が見た時は、胸がつぶれる思いになって、今の平和が続きますようにと思ったのに。真

剣に何度も心の底から思ったのに。今、きっと私は、本の中のあの女性のように、あの兵士のようにいのりたのではないか。彼らはみんな、自分だけでなく家族や大切な人のためにいのりしている。今まで私がしていたいのりは、自分のためだけに向けたいのりだったのだと気づいた。

この本で、いのりには平和へのいのり、自分に問いかけるいのり、亡くなった人へのいのり、大地や宇宙へのいのりがあると知った。

私は今回、だれかのために、平和のためにいのりを知った。それは、原爆が落ちた時の当時の人々、空しゅうをおそれて、防空ごうを掘り続けた自分と同じ小学生達の思いを想像してみたからだ。怖かっただろうな、辛かっただろうな、逃げ出したかっただろうな。そして、そんな事がくり返されませんようにと強く思う。相手の気持ちを おもい、考える。これがいのりだと思ふ。

亡くなった人、また、平和に対してのいのり、では、自分はどうしたら良いのかと心の中で問う。いのりは、ますます強くなる。

最後に平和公園で、「平和祈念像」を見た。強い、強いいのりだと思つた。その強いいのりの気持ちに心にひびいた。何も言えなくなつた。本の大人と子供のように自然と笑顔がなくなった。自分の心の中でだけ何度も言つた。

「平和であり続けますように。」

書名 いのり
著者名 長倉 洋海
発行所 アリス館